



てとれた。短く刈り上げたヘアースタイルに、黒ぶちメガネが良く似合っている。それに、午後の無精ひげと、ネクタイを緩めたワイシャツの襟元が、開けっぴろげな性格を感じさせた。

しばらくすると、立ち客の居なくなった通路を車内販売の売り子がカートを押してきた。隣の安田は、書類をバッグにしまうと、その上に今買ったばかりの缶ビール二缶につまみ一袋を載せ、おもむろに一缶の栓をパシッと抜くと気持ち良さそうに喉を鳴らした。

奥村は暗くなった窓外の滲んだ灯りに目を向けた。そして、自分の意思に構わず刻々と新天地に向かう車両の微かな揺れの中、慣れ親しんだ大船・東京間の通勤電車のぎっばく響きが、どんどん遠いむかし耳にした懐かしい音色になっていくように感じられた。奥村の目に、窓ガラスの向こうに見える山里の灯りと、同席している連中の姿とが重なり合った。「決まるといいわねえ、りょうちゃん」

車窓を眺めていた女の子が男の子に顔を向けながら言った。

「ああ、ゼミの連中は殆ど決まったからな。俺もこのまま年は越したくないし」「一次のときは、三十人くらいだったんでしよう、こんどは何人くらい集まるのかしら・・・」

「採用枠が四人だろう、だったら、その倍くらいじゃないか。マコちゃんは？」  
「私の方はどうかなあ、十人くらいなのかな」

「どうなんだろう、という顔つきをしたまま、二人の会話が途切れた。

「学生さん？ 就職活動？」  
一缶を一気に飲み終えた黒メガネの安田なる男が、途切れた会話に入り込む様に声を掛けた。

「はい、そうです」  
りょうちゃんと呼ばれた男が応えた。  
「大変だね、今年も相変わらず厳しいらしいからなあ。あなたも？」  
と言いながらマコちゃんという女の子

の顔を見た。

「ええ、応募先は違いますが、同じ新潟市内を希望しているんです」

「二人とも新潟出身？」  
「彼女の方が・・・もつとも上越市だからだいで離れていますけど」

「じゃあ、君は新潟とは関係ないのか？」  
「はい、出身は宮崎なんです」

その言葉に奥村は、思わずりょうちゃんの顔を見てしまった。

「ほうし、そりゃあ又・・・」  
と言って安田の言葉が中途半端に止まった。おそらく、九州の男がなんで新潟なのかと考えたに違いない。

「そうか・・・まあ、Uターンや自宅通勤にこだわっていたら難しいもんな、今どきは」

と間をおいてから言った。  
「・・・」  
ふたり一緒にうなずいている。  
「おんなじ学校？」  
安田はズケズケと尋ね始めた。

それが嫌味に聞こえないのは、この男の特性なのかもしれない。柔らかな表情で語り口が優しいのだ。奥村は聞くとともにしに入ってくるやりとりで惹かれていった。二人は大学も違えば専攻も理系と文系で異なっているという。

「で、なんで二人一緒なの？」

一番気になっていたことも知れないことを、安田がスラスラとした調子で口にした。

「はあー・・・」

りようちゃんは少し言いよどみながらも、安田への親近感からか卒業したら結婚することで同棲しているとまで打ち明けた。そこまで口にする男の子も男の子だと思っただけ、それ以上に、安田には他人の胸襟を開かせる何ものが備わっているらしい。

「なるほどねえ・・・新潟で暮らしたいわけか。女の地盤で暮らすわけだ」

そう言いながら、安田はパシッと二缶目の栓を開けた。

「親は何て言ってるの？」

奥村は、次から次へとよく突っ込むもんだとあきれつつも、目の前の男女と安田のやりとりで耳が向いてしまった。奥村にはこの学生より少し年上だが未婚の長男・長女がいる。いつかこういう事態が訪れかねないのだ。

すっかり気を許したように、あけすけに自分たちの境遇を話し始めたりようちゃん。二年生のとき、サークル活動で大学の垣根を越えたイベントで知り合った。

その後、三年生の夏休みに入ってから彼女の部屋に転がり込むように一緒に暮らし始めたという。二人の関係は、彼女の親が最初に気づいたのだそう。母親の直感か、上京した際立ち寄った娘の部屋の匂いを嗅ぎ分けたらしい。ひと悶着あった後、双方の親から見離され、途絶えた仕送りをアルバイトでカバーしていると屈託無く話している。

「でも、いいんです。僕たちが頑張れば親もいつか分かってくれると思っていま

すから。就職したらきちんと結婚するつもりです」

若者にありがちな、その場しのぎの行動でもなさそう。

「それじゃあ、頑張らにやあなあ。試験日はいつ？」

「明日です」

「明日か。あなたも？」

マコちゃんが、「はい」とうなずく。

「そうか・・・で、卒業までに決まらなかったらどうするの？」

これから受験するというのに、嫌味にならないのか。奥村は他人事ながらハラハラしてしまった。

「そのときはその時ですよ」

そんな心配は無用だったらしい。不安な気持ち以上のものが彼らにはあるようだった。安田はビールを一口飲むと何かを思い出すように、しばし沈黙した後「俺の頃は楽だったなあ」とつぶやいた。

「はあ？」

「いや、就職活動がさ。なにしろバブル

絶頂の頃で学生の方が企業を選んでやるって、そういう雰囲気が強かったねえ。友人たちから面接時の話を聞いてると、応接室でふんぞり返っていたっていうから。ある中小企業なんか、当社に入社したら通勤用の車を差し上げますって求人情報誌に載つけてたよ」

「へえー、今と全然・・・」

「そうだろうねえ。企業説明会ってやつに出席すると、今はどうか分からないけど交通費を出してくれてね、お陰で俺なんか北海道から、九州まで飛び回ったものさ。大半の学生がこんな調子だった。しかも自分の実力よりワンランクもツーランクも上の企業に採用されて、フワフワしていたのが沢山居た。俺もそのうちの一人だったがね」

「あーあ、もっと早く生まれてればよかった・・・」

「でもなあ、当時は企業も学生も浮かれていたから、のりで企業を選んだ連中は大概後悔してるよ。バブルが弾けて見り

やあメツキが剥がれた鉄のようなものさ。企業も学生も・・・金だと思ったのがとんでもない間違いだった。地に足がくっついてなかったんだよな」

最後の方は、自分に言い聞かせているような口調になっていた。

「今日はどちらへ？」

りようちゃんが尋ねた。

「終点・・・終着駅」

終点と言ってからわざわざ終着駅とつけ加えると、安田はまたビールを口にした。

(じゃあ自分たちと一緒だ) という空気が二人から流れてきた。

「大手企業に入ればこれで安泰なんじゃない時代じゃねえーな。どこの会社に入るかでなく、どんな仕事をやるかの方が、よっぽど大事だったことをつくづく思い知らされたよ」

ビールが効いているのか、安田は学生に劣らず自分を語り始めた。

「今は、企業もサラリーマンも受難の時

代だ。でもな、俺は技術系だが、会社は変わっても仕事の専門分野は変わっていないよ。常にランクアップを狙ってきた。これからもそうだ。自分の強味で勝負していかなきゃなあ」

「彼も技術系で、受験しても俺のやる仕事と違うって、自分の方から断るんですよ」

とチョット睨むような顔をしたマコちゃん。その顔がまた愛くるしい。

安田の口から「ホー」と言う声が漏れた。

「で、今は？」

りようちゃんはりようちゃんてオープンな安田に興味を抱いたようだ。

「実は・・・今は浪人中。新卒で入社した会社が、バブルの後遺症で倒産しちゃって。その後再就職した企業もこれまた倒産・・・」

そう言いながら三度目の就職活動さと安田は頭を掻いた。

りようちゃんたちは、どう応えたらいい

いのか戸惑っている様子。

「明日その会社を訪問するんだ。俺の人生が変わるかもしれない日だよ」

「明日?・・・」

「そう。もし通れば女房子供を置いてしばらくは単身赴任だな・・・」

「お住まいはどちらなんですか?」

「シ・モ・イ・グ・サ、西武新宿線の」

「下井草?」

「へえー、偶然だなあ」

マコちゃんとりょうちゃんは、びっくりしたような声を出した。

「なんだ君たちも下井草か」

「ええ、じゃあどつかでスレちがっているかも知れませんか」

「俺は石神井方面に向かって右方向さ」

「僕たちは左方向だから逆だ」

「そうか、でも同じ沿線の住民だ。お互い頑張ろうぜ」

そう言った横顔はすでに赤く染まっている。あまり酒は強くないのだろう。

奥村は流れ行く車窓に顔を向けた。

列車は、道路の灯りが映しだす稲刈りが殆ど終わった田園地帯を走っている。

車窓に映った自分の顔が、やけに老けた顔つきに見え慌てて両手で頬をなぞった。

連中の話を聞きながら、遠い昔の新入社員時代をそして時の流れを思い浮かべていた。

奥村が大学を出た年に大阪万博があった。

「こんにちは、こんにちは、世界の人が・・・」と賑やかな歌が流れていたのを思い出す。卒業と同時に今の会社に入った。正確には、直前まで居た会社ということになるが。

「橋工業」という大手系列の自動車部品メーカーである。文系出身の奥村は、ここではずっと事務畑を歩んできた。新人時代、経済はまだ右肩上がりの様相を示していた。自動車業界は、昭和三十年代半ばから車社会という時代の追い風を受けて急成長を遂げつつあった。その後、オイルショックや為替レートの上昇など

逆風の時代もあったが、それらを飲み込みつつほぼ順調に拡大してきたのである。

橋工業もそれと並行するように成長してきた。だが平成年度に突入しバブルの崩壊で業況は一変。メーカーの系列改編や、生産拠点が海外に移るようになると、根本から経営戦略を見直さざるを得なくなっていた。

こうした環境変化のさなか、二代目から三代目へと社長が交代したのだ。トップの刷新は、経営戦略の一環でもあった。

業務管理の部長職にあった奥村は、一週間前に出向命令を受けた。

社長は、淡々とした口調で辞令を読み上げた。出向先は、新潟市近郊に本社工場をもつ「日本海技研」という会社だった。車輛ボディの組立ロボット生産が主力であったが、近年様々な分野のロボットを研究開発しているという。

内示はひと月ほど前であった。「あなたも今回役職定年を迎えるが、当

社での継続雇用は難しくてね。そこでな  
んだが・・・」

奥村は、社長が三代目に変わったとき  
から、(いつかこういう時がくるだろう)  
と予感はしていた。トップの若返りに伴  
い、古参の社員はいずらくなっていたの  
だ。不思議な巡り合わせか、当社は初代  
から、二代目、三代目と共に婿養子であ  
った。男子がいない女系家族ということ  
だが、結果的にこの方が経営は順調に伸  
びた。出来の悪い身内の男子より外部か  
ら優秀な血を導入できるからなのだろう。

新社長は、奥村より三歳若かった。昔  
は同僚でもあり一時期は奥村より格下の  
時期もあったのだ。切れ者で通っていた  
三代目は社長就任後、徐々に前社長当時  
の幹部を遠避け始めたのである。前社長  
との経営スタイルの違いを明確に具現化  
したかったのだろう。いわば新たな政權  
作りを行ったのである。奥村はもし仮に  
自分が新社長の立場に立ったならば、そ  
れと同じような措置を取るかも知れない、

と理屈では納得していた。しかし、情の  
部分で全面的に受入れることは出来なか  
った。

ある日、意見の違いが重なったとき、  
「あんたは俺を社長と違っていないだろ  
う？ 上司と考えていないんだろう？」  
と怒鳴られた。トップの職務を全うせん  
がため、無理やり力で押さえ付けようと  
する姿勢が感じられた。サラリーマンと  
しての悲哀を肌で感じた瞬間であった。  
その時点で奥村は三代目社長との精神的  
な決別を図ったのである。

あれから三年。理と情の狭間で奥村は  
常に辞表を懐に忍ばせていた。女房は奥  
村の苦渋を知ってか知らずか、「今の時代、  
職場がある人は幸せよ」が口癖だった。  
そんな矢先、出向命令が出たのだ。出向  
といっても片道切符である。二、三年出  
向という形を取りその後出向先に転籍と  
なる。ただし、出向先が受け入れればの  
話である。最も、奥村が転籍を拒むこと  
だって可能なわけだが。いずれにしろ、

転籍が叶わなければ奥村には落ち着く場  
所がなくなる。その場合、今後の生活を  
考えれば、今、目の前に居る連中と同じ  
ように就職活動をせざるを得ないのだ。  
三十五年間も勤めた企業から、業種の異  
なる職場に移ることは、たとえ職務は類  
似しているとは云え転職の経験が無い奥  
村には未知の不安があった。

明日の初出勤にしても、遠い昔、学卒  
入社のあの期待に満ち溢れた自分とはず  
い分異なっている。(歳をとるとはこうい  
うことなのか。夢は歳とともに萎んでゆ  
くものなのか) 冒険心の薄まった自分に  
驚いた。

目の前の若い二人は、すでに同棲して  
いると、屈託無く話している。女の子に  
とって就職先は何処でもいいのかもしれ  
ない。ただ、二人の就職地が同じである  
ことが絶対条件なのだ。生活にさしたる  
不安を抱いていないようにも見える。り  
ようちゃんという彼もまた、口では早く  
内定先をと言ってはいるが、どこまで新

湯での生活のことを考えているのか。若さが全てをカバーしているのだろうか。

また隣の安田クンは、専門技術を武器にして新たな就職先の開拓に精を出している。会社がどこであろうが自分の力が発揮できれば、成長できればそれでよいのだと割り切っている。いずれにしろ彼らは今の立場は不安定であるが、怯んではない。彼らの目はしっかりと前を向き、しっかりと両足で歩もうとしている。

内示があつてから、奥村は一度新潟に足を運んでいる。事実上の採用面接であった。挨拶を済ませた奥村の目に映った社長は、技術屋あがりの頑固さと人の善さを兼ね備えたような好人物に映った。「奥村さん、わが社は技術先行の開発型企業です。これからも積極的に技術屋を採用して小なりといえども、自ら光り輝く企業を目指していきます。問題は管理なんです。技術力と管理力のバランスがよくないんですよ。その辺を貴方から見ただきたいのです。橋工業でのキャ

リアを活かしていただきたいのです。慣れない地方暮らしは大変でしょうが、よろしくお願いします」

奥村より五歳年上の社長はそう期待とねぎらいの言葉をかけた。職責は、「総務部長」という。将来は役員にとの言葉も添えてくれた。少年時代、鉄腕アトムに魅せられたというこの社長には、なぜか話していると安らぎが感じられるのだった。三代目社長とは対照的な雰囲気を持つていた。

「間もなく終点、新潟・・・」のデジタル表示が流れ、続いて社内アナウンスが独特の響きで聞こえてきた。

（終着駅か・・・俺の人生のようだ）  
やがて列車は夜の新潟駅に到着した。くだんの学生と安田クンは「じゃあね」のひと言でホームの雑踏に消えていった。熱く語り合っていた彼らにしては実にさりげない別れ方だ。

乗降客の狭間を抜けて駅舎を出た。頬に触れた新潟の夜風が、奥村の心をオプ

ラートで包むがごとく、爽やかに出迎えてくれた。

タクシーに乗るや間もなくホテルについた。奥村の入居予定であった借上げ住宅の準備が間に合わず、今晩からしばらくはここが住まいとなる。フロントに告げると、何やら書類が届いているという。キーを受け取り、まずは部屋に向かった。

上着をロッカーに掛け、スリッパに履き替えほつとする間もなく、渡された書類封筒を開けた。

「お疲れ様です。早速ですが、明日採用試験の面接を実施いたします。出社早々恐縮ですがその席に立ち会っていただきたく。受験者のリストならびに履歴書写し等を同封しておきましたのでお目通し下さい。本来もっと早く提供すべき資料ですが、今般やむを得ずこのような形をとりましたことご了承下さい。総務部橋本直子」

総務部は、人事も担当し奥村を含めると総員五名であった。橋本は古参の社員

で会社の事情には精通していた。彼女と上手く折り合うことが出来るかどうか、奥村の今後に係わっているらしい。

採用試験は、新卒者と経験者の二コースあつて、応募者は新卒者七人、経験者三人であつた。新卒者は最終面接で社長も同席するという。経験者の方は試験というより、今までのキャリアの確認と当社での活用分野のすり合わせが主体である。従つて、こちらの面接は幹部技術者二人と社長が同席して話を聞くことになつていたので、奥村はただ同席して状況を見守る程度であろう。新卒者が九時から、経験者は十一時からと記されていた。

各受験者の書類に一枚一枚念入りに目を通した奥村は、ある新卒者と経験者の写真付き履歴書を横に並べた。そして二つの書類を何度も何度も見返していた。そして、(袖すりあうも・・・か)とつぶやきながら立ち上がり、ゆっくりと窓の方に歩み寄つた。

(さて、明日だ。明日どんな出逢いが待

っているのか・・・明日はそれぞれのチャレンジの始まりだ。奥村の胸に人生の不可思議な熱いものが込み上げてきた。

カーテンを開けると、九階の窓から新潟の夜景が映し出された。灯りは生活感を醸し出してくれるもの。あの灯りの下でみんな生きている、俺もここで生きていくのだ、そう思わせてくれるのだった。終着駅は始発駅でもある。

別れはまた逢う日の始め・・・

再会シリーズ 第6話 終わり